

あすへつなぐ

自立を助ける

Ⓣ

引きこもりゼロに

団体だったが、今年一月にを強化。運営も岩川さん夫婦恵さん(三三)に受け継がれNPO法人化し、経営基盤 妻から、耕治さんと妻の智た。二人は、ふれあい教室

のほか、ボランティア、パソコン教室、他施設との交流など時代の変化に対応し、実践的な活動を展開する。

蔵王の頂で子どもたちの歓声がこえました。

六月二十一、二十二の両日、蔵王いこいの里が開いた「自然ふれあい教室」。山形県内の小学生九人が参加し、自然観察や農作業を経験した。淡い紅色のコマクサ、雪渓、自分で収穫した山菜の味…。子どもたちは五感で自然の素晴らしさを感じ取った。

「不登校や引きこもりにならないように、小さい時から自然や人に触れさせ、感性豊かな人間に育てるのが狙いです」。岩川松鶴さん(七〇)、久子さん(六九)夫妻の長男で、子どもたちを案内した耕治さん(三三)は言う。

いこいの里はずっと任意



今年から里の運営の中心になった耕治さんと智恵さん。動植物との触れ合いを通し、命の大切さも教えている

耕治さんは、二〇〇六年十二月まで約十年間、郡山市の旅行会社に勤めた。親の跡を継ぐ考えはなかったが、数年前、中学校の修学旅行に同行すると、どの学級にも一人か二人は不登校の生徒がいることに気付いた。

「自分が中学生のころは、不登校の生徒はほとんどいなかった。今は子どもは減っているのに、不登校が増えていると実感した」と耕治さん。同じころ、子どもが親を殺す凶悪事件が相次ぎ、「里の子も一歩間違えば、事件を起こしかねない」と思い、両親の仕事の重要性を再認識した。

志継ぎ2代目夫婦奮闘

看護師の仕事をする傍ら、長男(六)と次男(五)を育てていた。「自分たちの生活があるのに」という思いが強かった。その智恵さんが徐々に変化する。不登校の子どもやリストカットをした子どもを持つ仕事仲間の話や聞き、気持ちがいこいの里に傾いていった。

運営を受け継いで約半年。耕治さんは運営全般、カウンセラーの資格を持つ智恵さんは相談業務を受け持ち、多忙な日々を送る。二人が最近心配しているのは、引きこもりの相談が増加していることだ。三十歳をすぎたケースも多く、年齢が高くなる傾向にある。

東北地方の孝さん(仮名)も昨秋、三十五歳で里に来た。高校時代、親友が自殺して不登校に陥った。以後、新聞配達の仕事もしたが、長続きせず、十数年、酒を飲んで引きこもる日が

続いた。妹の結婚相手や子どもの顔も知らない。たまらず親が強制的に連れてきた。

孝さんは「十九歳か二十歳のころにこんな施設に来たかった」「親が死んだら自分も死ぬ」とこぼした。十回近く脱走を試み、その都度引き戻したが、四月の脱走を最後に帰らなかつた。

「引きこもりは、貧しい国には見られず、先進国にしかない。日本では引きこもり、不登校の若者が約百六十万人いると言われる。何とかしなければ、日本の大きな損失になる」と耕治さん。

里には、今でも孝さんの衣類などの荷物は残したまま。いつ戻ってきてほしいように…。

本シリーズは随時掲載し、お寄せください。河北新報社編集委員＝電022(211)1261、ファクス(211)1256。メールhenshui@p.o.kahoku.co.jp

のスタッフと客計約千... 性は二瞬、体が浮き上り付け、直後に激しい雨が人だった。スタッフの男「がるほどの強い風が吹き降ってきた」と話した。

エンジン下側 焼け焦げた跡